

第10回「富山の生物多様性」公開講演会 講演要旨集

仲間を見つけよう！

富山の生き物同好会



令和8年5月23日(土) 13:00~16:00

主催：富山県生物学会
富山県中央植物園 / 指定管理者：(公財)花と緑の銀行

プログラム

13:00-13:10	開会のご挨拶	稲村 修（富山県生物学会）
13:10-13:30	鳥類	和田浩一（日本野鳥の会富山）
13:30-13:50	両生・爬虫類	草間 啓（富山県爬虫両生類研究会）
13:50-14:10	水生生物	不破光大（うおづ水辺の調査隊& うおすいサポーター）
14:10-14:20	—休憩 10分—	
14:20-14:40	貝類	高山茂樹（富山貝類同好会）
14:40-15:00	昆虫	岩田朋文（富山県生物学会）
15:00-15:20	植物	石澤岩央・松浦雄三（富山県中央植物園 友の会植物誌部会）
15:20-15:50	—質問応答・意見交換 30分—	
15:50-16:00	閉会のご挨拶	中田政司（富山県中央植物園）

- ・講演は質疑応答を入れて各 20 分。

富山県生物学会事務局 〒937-0857 魚津市三ヶ 1390
魚津水族館内 TEL: 0765-24-4100
<https://toyamaseibutu.hariko.com/>
富山県中央植物園 〒939-2713 富山市婦中町上轡田 42 TEL: 076-466-4187
<https://www.bgtym.org>

日本野鳥の会富山の活動紹介 -カワイイを超えて-

和田浩一（日本野鳥の会富山）

「日本野鳥の会富山」は、全国組織である「(公財)日本野鳥の会」の富山県内の連携団体である。「野鳥に親しむ機会」を設け、「野鳥に関する科学的知識」を得て、「野鳥が生息する環境」を保全することを目的に、1995年に設立された。会員数は169名（2026年3月）である。

当会の主な活動は次の通りである。

- ①探鳥会の開催：富山県内で年間27回実施
- ②会誌の発行、HPやFacebook、インスタでの発信：会誌は年間5～6回発行
- ③野鳥写真作品展の開催：隔年で県民会館にて開催
- ④野鳥講演会の開催：会内外の講師を招き、年1回開催
- ⑤野鳥調査：会独自のハクチョウ類・ガン類・カモ類調査、年間鳥類リスト作成など
- ⑥環境保護活動：当局への意見書、要望書の提出

「日本野鳥の会富山」の特徴は、和気あいあいとした「同好会」的な側面と、野鳥を調査し生息環境を保護する「自然保護団体」の側面をバランスよく保っているところにある。一方で、近年の会の活動には次のような課題があると考えている。

- ・会員が高齢化し、会員数が漸減している。
- ・会員の参加意識が変化している。（観察よりも写真、探鳥会リーダーの不足など）
- ・リスクマネジメントがより厳格に求められている。（マナー、モラル、社会的な責任）
- ・他団体、機関との交流が少ない。
- ・環境保護に対して会の活動の「限界」がある。

最近の「探鳥会」参加者の声に耳を傾けてみると、よく聞かれるワードが「カワイイ」である。普遍的な野鳥の「かわいさ」「美しさ」に出会えることこそ、当会の活動の最大の原動力であろう。「カワイイ」を入口として、その向こう側にある野鳥の本当の姿まで、どれだけ想像してもらえるかが今後の当会の活動の鍵となるかもしれない。

わだ こういち 1961年生まれ。野鳥観察歴1980年くらいから。1983年から日本野鳥の会（本部）会員（初級～中級から脱出できずに、昭和・平成・令和～）。2011年から日本野鳥の会富山・調査部長。2026年から事務局長。



▲メジロ

◎奥田 實



▲呉羽山探鳥会

◎和田浩一

みんなで楽しむ！観察・調査

草間 啓（富山県爬虫両生類研究会）

富山県の陸部には、両生類 19 種（外来種 1 種含む）、爬虫類 17 種（外来種 3 種含む）の計 36 種類が記録されており、高山帯から海岸付近まで多様な環境に生息している。日常的に目にする種も存在するが、多くは意識的に探さなければ出会うことが難しい生き物たちである。

私は 2010 年に富山県に来て以来、野外で見せる彼らの生き生きとした姿に魅了され、個人でフィールド調査に明け暮れていた。2016 年に魚津市でハクバサンショウウオが発見された際、その調査を通じて長野県の有志調査チームの活動に同行する機会を得た。そこで年齢や職種の垣根を越えた有志が熱意を持って楽しみながら活動する姿に深く感銘を受けた。富山でもこうしたプラットフォームを構築したいと考え、2020 年に有志らで「富山県爬虫両生類研究会」を設立した。本研究会は単なる同好会にとどめず、規約や役員、口座を整備し、事務局を魚津水族館に置く任意団体とすることで、会員が所属先として公式に名乗りやすい組織基盤を整えた。これまでに、地道な努力が必要な富山県内における希少な両生類の生息調査を協力して行い、その結果を基に行政施策への提言、「レッドデータブックとやま」改訂への情報提供など、公的な生物多様性保全にも寄与してきた。

本研究会は、今後も富山県における両生類と爬虫類の生息調査や生息環境の保全に努めるとともに、誰もが立場を越えて楽しく協力し合えるネットワークの発展に貢献していきたい。また、観察や調査を通して多くの方にフィールドワークの楽しさを知ってもらい、次世代を担う人材育成の一端を担いたいと考えている。

くさま さとし 魚津水族館 飼育員。昭和 58 年、長野県生まれ。東海大学海洋学部を卒業後、(株)カインズ、名古屋港水族館を経て、現職。富山県ハクバサンショウウオ保護監視員。



▲ハクバサンショウウオ

©草間 啓



▲調査風景

©草間 啓

みんなで守る水辺のいきものたち —調査隊とサポーターがつなぐ"仲間の輪"—

不破光大（うおづ水辺の調査隊&うおすいサポーター）

近年、環境変化や開発の影響により、身近な水辺の生態系は急速に変化している。今回は、魚津水族館をプラットフォームとして活動する2つのグループに焦点を当て、彼らがどのようにして地域の生物多様性を守る「仲間の輪」を広げているかを紹介する。

まず「うおづ水辺の調査隊」は、自然観察や生物採集を通じ、自然への興味や関心を深めると同時に、疑問を見つけ解決する力を身に付けることを目的とした。フィールドワークでは、富山県内の河川や海岸、ビオトープなどで学芸員とともに実際に生き物を採集。そこで生まれた疑問や会話から、子どもたちは自由研究のヒントを見つけていく。研究結果は魚津水族館で発表された後、常設展示に組み込まれており、今や水族館の人気コーナーの一つとなっている。こうした活動は単なる体験にとどまらず、環境保全の意識を高める教育活動として、富山の自然を伝える重要な基盤となっている。

一方、「魚津水族館サポーター」は、市民がより自由かつ親しみを持って水族館や自然に関わることを目的としたボランティアグループである。近年は「ミッケビオトープ」を主なフィールドとして、生物観察だけでなく、地元の営農組合と連携した農業体験プログラムなども積極的に実施している。最大の特徴は、決められたプログラムに参加するだけでなく、自分たちの「やってみたいこと」を自発的に提案し、それぞれのスタイルで水族館の新たな可能性を生み出している点にある。この多様な活動を通じて、世代を超えた豊かな交流が生まれている。

これら2つの活動は、富山の自然を知るという共通の目的において、魚津水族館の大きな推進力となっている。調査隊は「学ぶ側」から「伝える側」へと成長し、サポーター活動からは市民同士の新たなコミュニティが誕生した。魚津水族館を介することで、地域の生物多様性は、住民にとって「守るべき自分たちの宝」として実感されるようになっていく。

生物多様性の保全は、一部の専門家だけで成し遂げられるものではない。プロの視点による継続的な調査と、地域住民の主体的な関わりが組み合わせることで、初めて持続可能な保全活動が可能となる。実際の活動風景も交えながら、これからの水辺を守る「仲間の輪」のあり方について、共に考えていきたい。

ふわ みつひろ 魚津市農林水産課水産振興係。昭和54年、富山県朝日町宮崎生まれ。富山県内の淡水魚、ヤゴ、淡水コエビ、淡水貝の採集に力を注ぐ。趣味は生物飼育と食べた魚の耳石収集。著書に「富山のさかな」（共著）、「魚津のさかな」（共著）「富山の伝統的魚食文化」（共著）など。



▲エゾイトンボ

©不破光大



▲田植えの農業体験

©不破光大

富山の貝類事情と富山貝類同好会

高山茂樹（富山貝類同好会）

I. 富山の貝類事情

富山湾は、河川水の影響で塩分濃度の低い沿岸表層水、その下に暖かく塩分濃度の高い対馬暖流水、そして水深 300m 以深には低温で栄養豊富な日本海固有冷水が広がる。これらの水域には性質の異なる貝が生息し、富山湾で記録された貝は 550 種を超えるが、太平洋側の県の 1/3 ~ 1/6 に過ぎない。富山市から西の砂浜では、沿岸表層水の貝が打ち上がる。打ち上げ貝の種類と量で地先の海の状態が分かる。これまでに、外来種の侵入・定着や有機スズ化合物汚染、暖海性貝類の増加、海岸のゴミ問題などの影響を受けてきた。対馬暖流水の貝類は、生息環境の悪化が懸念されるが、貝を対象とした報告はほとんどない。日本海固有冷水の貝は、有用種のエゾバイ類の調査はあるが、その他の貝の調査は少ない。現在の富山湾に何種の貝が生息し、生息状況がどうなのかが不明の種も多い。

富山県の淡水貝の全県調査は、富山県の水生生物（1995 年）の作成時に行われた。その後、レッドデータブックとやまの作成に合わせて調査が進み、全国の 3 割の 38 種前後の淡水貝が記録された。急流河川が多く、下流部、河口域の発達が悪いことや用水路の改修などで淡水貝の生息環境は良くない。近年、分類の再編及び外来種が確認されている。

富山の陸産貝類は、菊池勘左衛門の富山県の陸産貝類目録(1940 年)に始まる。北陸地方にのみ分布するマイマイや微小貝も含め、115 種余りの記録があるが、全容は不明である。

II. 富山貝類同好会について

富山貝類同好会は、1994 年に設立。会員は富山県内の貝類に興味関心を持つ人で構成し、貝の学習や研究と会員の親睦を図り、富山県や富山湾などの貝類相の解明に貢献することを目的としている。主な活動は、同好会の設立時から続く、富山湾及び近県の打ち上げ貝の調査や標本の同定、貝類についての勉強、レッドデータブックとやまへの協力などを行っている。年齢制限はないので、興味のある方のご連絡ください。

富山貝類同好会事務局（高山）TEL 090-9769-2453 / Email : kukuri123456@outlook.jp

たかやま しげき 昭和 31 年大阪市生まれ。魚津水族館で、富山湾の貝やクラゲ等の分類、生態などを調査。富山県の貝の現状調査を続けている。2014 年～富山貝類同好会事務局。



▲ヒメカノコアサリ

©高山茂樹



▲打ち上げ貝の調査

©高山茂樹

富山県内の昆虫系同好会の現状

岩田朋文（富山県生物学会）

結論としては、現在、富山県内で活発に活動している昆虫系同好会はないと思われる。その前提で県内の昆虫系同好会を紹介すると、富山県昆虫同好会（会誌：AMICA）、越中むしの会（会誌：越虫）、きんだーばぐ発行会（会誌：KINDER BUG）などが挙げられる。多くの団体は1990～2010年代までは活発に活動していたようであるが、現在は会誌発行や例会活動が行われていないようで、休会状態と考えられる。（ただし、富山県昆虫同好会については、「富山県の昆虫シリーズ」が2025年にも刊行され、休会と活動中の境界にあるともいえる。）

昆虫だけではなく、生き物全般の同好会としては、富山県生物学会（会誌：富山の生物）、高岡生物研究会（会誌：JANOLUS、主に高岡地域を対象とした団体）、富山県ナチュラリスト協会（同好会ではないが、昆虫を含む生き物好きも混じっている組織）などがある。これらの団体は、現在も会報発行や例会が行われていることから、活動中といえる。

さらに、同好会とは少々毛色が異なると考えられるが、昆虫好きが所属している可能性がある団体としては、富山県教育会、富山県理科教育振興会、富山県生物教育研究会、富山県高等学校生物研究会、富山県高等学校教育研究会生物部会などが考えられる。加えて、「ホテルを守る活動」などに取り組んでいる環境保全活動団体が複数あるようで、富山県庁ウェブサイトにもまとめられている。

隣県に目を向ければ、越佐昆虫同好会や石川むしの会など、いわゆる典型的な昆虫系同好会があり、現在でも活動している。

以上を総括すると、現在、富山県在住者が昆虫系の同好会活動に加盟したい場合は、隣県の昆虫系同好会に所属するか、昆虫だけが対象ではないものの、富山県生物学会に所属するのが無難と思われる。

いわた ともふみ 富山市科学博物館 主任学芸員。平成4年埼玉県生まれ。修士（農学）。愛媛大学農学部、同大学農学研究科（修士課程）卒業後、現職。専門は昆虫分類学。富山県の昆虫相解明、北陸地方を主とした希少水生昆虫類生息調査に取り組んでいる。



▲オオミズスマシ

©岩田朋文



▲水生昆虫の調査

©岩田朋文

富山県植物誌改訂版の編纂をめざして ～とやまの植物に会い行こう！

石澤岩央・松浦雄三（富山県中央植物園友の会 植物誌部会）

植物誌部会は、富山県中央植物園友の会の一つであり、1983年に刊行された富山県植物誌（大田・小路・長井）の改訂版編纂の科学的証拠となる植物標本の採集・作製を行っている同好の志の集いである。活動は毎月第2土曜日と第4日曜日に行っており、5月から11月上旬まで（真夏と荒天時を除く）は現地調査を、真夏と冬は自らが集めた植物の同定会を行っている。

最近の活動は、富山県生物学会の合同調査関係や初めての場所では維管束植物の全分類群を、標本の種類が少ない特定の地域では標本が無い分類群を調査（無いもの調査）している。

近年の例として、2023年、2025年の2か年で行った滑川市の「無いもの調査」では、あわせて97分類群の滑川市初の植物を発見・標本作製を行い、富山県中央植物園に保管された。

レッドデータブック(RDB)とやま 2012以降に植物誌部会調査会で発見した例としては、ヤチスギラン（富山県絶滅危惧Ⅰ類）、ウチワゴケ（富山県絶滅危惧Ⅱ類）、イイヌマムカゴ（環境省絶滅危惧ⅠB類・富山県絶滅危惧Ⅰ類）、カザグルマ（環境省準絶滅危惧・富山県絶滅危惧Ⅰ類）、ナガミノツルケマン（環境省準絶滅危惧）・富山県絶滅危惧Ⅱ類）などがある。

部会員らの情報提供により部会調査として詳細調査を行った例としては、サンショウモ（環境省絶滅危惧Ⅱ類・富山県絶滅危惧Ⅰ類）、ハンショウヅル（富山県絶滅危惧Ⅰ類）、マルバネコノメソウ（富山県絶滅危惧Ⅰ類）、ナニワズ（富山県準絶滅）などがある。

また、部会員らの情報提供により部会員有志で調査を行った例としては、ユウシュンラン（環境省絶滅危惧Ⅱ類・富山県絶滅危惧Ⅱ類）、クマガイソウ（環境省絶滅危惧Ⅱ類・富山県絶滅危惧Ⅱ類）、アカネスミレ（富山県絶滅危惧Ⅱ類）、ヒメナズナ（ヨーロッパ原産）などがある。

以上RDB掲載種を中心に紹介したが、富山県フローラの把握には普通種・外来種を含む毎回の調査の積み重ねこそが大切である。富山県中央植物園に保管されている6万点余の標本のうち植物誌部会調査会の標本は2.5万点あり、部会員の独自調査を含めると3万点を超えている。

いしざわ いわおう（昭和31年生まれ）・まつうら ゆうぞう（昭和51年生まれ）。富山県中央植物園友の会植物誌部会の部会員として長く活動を続けるとともに県内各地で自主調査も行っており、富山県初の植物を多数発見している。富山県植物誌改訂版では、それぞれ、シダ植物ほか数科、アカバナ科、の執筆担当である。



▲マルバネコノメソウ

◎松浦雄三



▲宇波川上流域の調査

◎大原隆明